
一五枚の夜景画（散文詩集）

山之口 博道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一五枚の夜景画（散文詩集）

【Nコード】

N9687F

【作者名】

山之口 博道

【あらすじ】

いつの頃からだろう。私の中に、一つの、遠くけぶる心象画が存在し、私は夜毎、その風景の陰鬱な絵画館へ遊魂してさまよった。それは気の遠くなるような心象の冒険であった。おもぐるしい朝の目覚めに私は還魂して現実との軋轢に苦しんだ。しかし、夜が来ると、私は見えざる幽谷のあの、奇怪な絵画館へと再び遊魂して凶脳するのだった。なぜなら、夜は決して秘密を明かさず、私の前で永遠に一つの謎としてあり続けるのだから。

小序

小序

いつの頃からだろう。

私の中に、一つの、遠くけぶる心象画が存在し、私は夜毎、その風景の陰鬱な絵画館へ遊魂してさまようのだった。

私の心象画集には夜の絵画がたくさん収納されていて、それは古びた幻想の絵画館に展架されているのだった。

狂おしい夜、私はそれを借り受けて、一人幻想絵画館に遊ぶこともたびたびだった。

ある夜、私は遠い思い出にふけりながら、ふとその夜の絵画集のことを思い出していた。

もう、何十年もほったらかしにしていたその画集、再び開いて見ることを私の心がひどく欲しているのだった。

それは気の遠くなるような心象の冒険であった。

そして、夜の絵画館での凶脳の一夜が終わると、おもぐるしい朝の目覚めに私は還魂して現実との軋轢に苦しむのだった。

しかし、再び、夜が来ると、憑かれた様に、私は見えざる幽谷のあの、奇怪な絵画館へと再び遊魂して凶脳するのだった。

なぜなら、夜は決して秘密を明かさず、私の前で永遠に一つの謎としてあり続けるのだから。

第1の夜景画

第1の夜景画ここに始まる

朽ちた倒木を超えて、夜の中を一人歩いてゆく少女があった。

白いドレスは長く引きずり、頭には花冠が無造作にあり、夜風にたなびいていた。

うつそうと繁り、星さえ見えない森の中に、光るものは蛇の眼と樹間に潜むふくろつの見据える瞳だけであつた。

地に盛り出た、根に躓いて、どさりと少女は倒れる。

その青い眼はキラキラ涙に濡れ、拭って見上げた闇を夜鷹が、ギーッと、かんだかい声を残して飛び移る。

少女ははつとして首をすくめる。おびえきつた少女は息を弾ませ走り出す。

木の間を抜けて、急に草地が開けると、そこには、崩れかかった城館が黒い旗をゆらめかせてそそり立っているのであつた。

妖しげな地霊のすすり泣きが籠つたように、響き、そのとき、樹海の黒い水面から真つ赤な月がゆっくりと、のぼり少女の影を長く草の上に漂わせた。

月明かりに照らされた草地には、馬車道がうねうねと彼方の城まで続く。

どこからか、かすかなときれがちな細い女の声が、少女の髪毛をなぶる風になって、

低く打ち響き

少女はあの城へ行かなければならない。

緩やかな夜の冷気をいまだ含んだ微風がそれとわからぬほど、漂い流れていた。

血を滴らせたような月は、城の肩の辺りを徘徊し、黒雲はちぎれてつきの面を不気味に掠めた。

垂れ込めた、夜空には見下ろす靈気の大きな瞳があり、少女はそれを確かに感じるのだった。

第1の夜景画ここに終わる。

第2の夜景画

第2の夜景画ここに始まる。

「お父様、ほら蛾が、、、。」

「え？どこに？」

「あつ、もういなくなつたわ」

くすんだ赤いビロードを貼り詰めた部屋にローソクは熱い涙を燭台に垂らし、まさに燃え尽きようとしていた。

炎がゆれて二人の影も揺らいでいた。

「おお、おお、火が消えそうじゃ。もう1本つけよう。」

「お父様、1本だけじゃなくてももっともつと、いっぱいつけて、、、。」

そして、もつと、キラキラするほど、明るくして欲しいの。」

「だが、おまえ、ロウソクはそう無駄に使っちゃいけないよ。じゃ、もう2本つけてあげよう。」

それでも、うんとあかるくなるから、」

「そうね、、、、そうして、、、。」

長い襷飾のいっぱいある、ローブのすそを床に預けて、その少女は窓の外の夜をぼんやりしながら見つめていた。

「雪はやんだらしいわ。」彼女は誰に言うともなくそうつぶやいた。ふと中を見るともう、老人はいすにもたれて気持ち良さそうに寝入っているのだった。

「眠ってしまった、、、。」彼女はまたそつとつぶやいた。

彼女は立ち上がると、静に城のそとへと出て行った。

彼女が大理石のホールを横切ると、その空気は少し揺れ、ローソクの炎もつられてゆらゆらとゆれた。

彼女は重い鉄門を押し開けた。

歩むにつれて、夜の中で、草は少女の足の下に踏みしだかれた。

ゆっくりと、歩いて雪原の境目まで来ると、もうそれから先は彼女は行けないし

また、行つてはいけないのだった。

『あの向こうに何があるのかしら？』

彼女はほっと、ため息をついた。

星もなく、。暗い空、そして、夜は遙かな雪原の彼方まで、まるで永遠を思わせて続いているのだった。

第2の夜景画ここに終わる。

第3の夜景画

第3の夜景画ここにはじまる、

私が眠りの馬にゆすぶられて何処と知れず夜の中をさまよって歩いてきたとき、

いつしか、かなたに白く光る妖女たちの舞う、荒れた野が望まれるところまできていたらしかった。

彼女達は皆、一様に丹砂の赤い瞳を暗に燈し、唇には青い燐の紅を塗っていた。

そして、赤い瞳と青くぼんやり燈る燐の光が私の前方に輪を描き、揺れさんざめく宴を形作っているらしかった。

私は眠りのおとなしい馬から、そっと、降り、いつか、ガシンとした、防具を身につけ、矛を抱え、もう一方の腕には盾をかがけているのだった。

そのとき、ゆがんだ笑いが私の脳髓の中を駆け巡り、神経叢のかいまをゆるく旋回しだしたのだった。

私は盾を取り落とし、静かな狂気が去りがてに渦巻くのをじっと、こらえていた。

私はその間、視覚を失っていたのかもしれない。やがて視覚がよみがえり、と、同時に

私の目の前に紫の光る目をした女が一人いた。

横たわった、私を静やかに覗き込み、不思議そうに見つめているのだった。

しかし、上空には薄羽色の大きな梟が鳴き騒ぎ、私の胸には毒蛇の牙が折れて突き刺さっていた。

妖しげな女はまるで童女のような、笑いを唇に浮かべて軽々と走り去っていったのだ。

薄緑にすきとおるガラスの胸は私を愛憐へと誘い、見えない小さな羽虫が地の上にそよいでいるらしかった。

そして、闇は、彼方に鋭い光の束で刺しぬかれてもがき、透明な血を流してのたうっていたのだった。

第3の夜景画ここに終わる。

第4の夜景画

第4の夜景画ここに始まる。

私が一人、暗い夜の中に佇んでいると、それはいつのまにか、キラキラした一つの光る眼になっていた。

瞳はくぐもり、うずもれて、次第に光りを失っていくかのようにだつた。

思い出がとめどもなく奔逸して、收拾が付かないほどだつた。

私の脳髓に重く滴る髄液の発光はしばたいて静もっていた。

うつろな、光りの細い糸が、私のまなこを抉り出し、どことも知れず落ちていく。

どこでもなく、それは広い紫の平原に。

私は幾つにも、枝分かれした影になっていく。
どこへたどり着くのかも分からない。

私はひたすら落ちていく。
どこへでもなく、紫の平原に。

私には見える。

私の不在の瞳に一つの紫のゆらめきけぶる平原が。

私はどこからともなくそこに降り立つ。

軽やかに、そして私はそこでゆっくりと歩み始める。

私は薄い皮膜を通して何かを見ようとしたのだろうか。

影が流れ物象が皆かすんで遠ざかって行くとき。

私は遠くで巨大な鐘が重々しく鳴るのを感じる。
なぜだろう。

その音は私の鼓膜を緩やかに破るほど重々しい。

私は紫色の霞の塊がまるで水中に絵の具を流したようにたなびいているのを見る。

私の目の前をかすめ、私はそつと、腕を伸ばして、その一筋の靄を捕らえた。

それはひんやりとして、

掴んだ指は桑の実を潰したような鮮やかな紫色に染まったのだった。

第4の夜景画ここに終わる。

第5の夜景画

第5の夜景画ここにはじまる。

重々しい夜陰は私の目を閉ざしてくすぶっていた。

私は一体何に追いかけられていたのだろうか？

でも逃げなければいけない。心がそう命じていたのだ。
足早ににげるわたしのあとにそいつは迫ってきていた。

ずしりずしりと何者かの重苦しい足音が私の後ろに近づいていた。

足音は次第に大きく響いてきた。

「早く早く、あの老婆にもらった、タロットカードを、お前の周りに並べるんだ。

早く魔方阵を作って妖魔が近づけないように、手遅れにならないうちに。」

誰かがそう私に叫んでいるようだった。

私は急いでポケットを探り、ボロボロになった羊皮紙で作られた、タロットカードを

取り出し、震えながら草の上に並べ始めたのだった。

やがて、並べ終わると一つのこつぽに入った死のどくろを抱えてしやがみこんだ。

と、木の葉を震わせながら、大きな陰獣が現れた。

私は息をこらして、見つめその時に耐えた。

しかし、陰獣は私が見えないようだった。

やがて暫くねめまわしていたが、諦めたように、低い絞るような、うめき声を残して去っていった。

そいつが木の葉と下草の彼方へ消え去ると、

それと同時に月が垂れ込めた雲のなかから、その真つ赤な血のにおいを

立ち込めさせて、姿をぬーっと現したのだった。

そうして、夜の静けさが一面に広がっていくのだった。

しかし、ギーギーと夜の鳥が月光におびえたように、そのとき飛び立ち、一瞬

深い月光の沈黙を破るのだった。

第5の夜景画ここに終わる。

第6の夜景画・第7の夜景画

第6の夜景画ここに始まる

私は夜の黒い肺臓の中に、ぐらぐらする頭を抱えながら歩いていた。私は降り積もった枯葉の上を、その暗さに、じっと、見張られながらどこまでも歩いていった。

やがて、こんもりとした樹木のアーチの中へ入り、その暗さの中に、ほっと一息を付いた。

確かに雨が降ってきているようだった。

私はその一滴を手を受け止め口に持っていた。しかし、それは木の葉のにおいでもなく、夜気のおいでもなく、それはなんとも不思議なおいがした。

底深いうめき声が地の中から木々の間に木霊し、私を恐怖のどん底に突き落とした、私は激しい嘔吐と眩暈を覚え、よろめく、足で樹間を駆け抜けまばらな林の中に出た。

そして、私は淡い月の光の下で見たのだった。私の手のひらで受けたのは雨ではなく、べっとりとした血糊であったことを。

第6の夜景画ここに終わる。

第7の夜景画。

第7の夜景画ここに始まる。

暗い春の野を私は幻覚に狩られながら渡り終わり山道に差し掛かっていた。

彼方に赤く燃えるような妖花が咲き乱れ、底へ吸い寄せられるように歩んでいたのだ。

ふと、胸の痛みを覚え私はその一輪をつんで香りを吸い込んだ。

私はその瞬間、自らの部屋に、消えかかったランプの下で一編の物語を書き綴っている自分に還った。

外には雨が降っていた。

それとも、葉先から夜露のしたたる音なのだろうか。

かすかで遙かな夢幻の世界へのそれは一つの扉だった。

私の紙の上に、1羽の小さなみみずくがうづくまっていた。

私はそれが指し示す方を見た。

壁にはいつの間にか穴が開いて一つの通路に成っていた。

私はみみずくのゆっくりした、歩みに従いながら、そこへ入っていた。

そこを出ると一面の暗い水辺が広がっていた。

水の上には、真っ赤な草がからみあい私の目を驚かせた。

大きな透明のしずくが私の上に滴り木々は血を吐いて狂いもがいていた。

私の頭に一つのうつろな春の夜があった。

そして、いつのまにか、みみずくは飛び去り私は一人春の野に退かされたのだった。

第7の夜景画ここに終わる。

第8の夜景画

第8の夜景画ここに始まる

その頃、私は1匹の老いた猟犬を連れて夜の森をさまよい歩いていた。どこからか、細波のような音が聞こえ

やがて、樹幹を行く微風が凪ぎ、見上げると木の間から血色の月が覗いていた。

まるで妖しい巨大な瞳のように。

私はかなり以前から猟犬の姿を見失っていた。

歩むにつれて、いよいよ森は暗く辺りの空気は灯心の周りのようにほの暖かく沈黙しているのだった。

遠く犬のほえるのが聞こえた。

それは消え行く木霊のようにかすかだった。

私は自分の意識が温まり、また冷えてゆくのを感じた。

私は肩の銃を下ろし立ち止まった。足元の細い草はいつしかピロイドのような厚い芝地に変わっているらしかった。暗くてよく分からないかったが、そこは小さな空き地でもあるらしかった。

私は上を見上げた。月もいつしか、雲に覆われたらしく空は暗黒だった。

私は再び歩み始めた。私はまた森の奥深く入ろうとしていた。

ガサガサと下草のざわめく音が私の耳に聞こえた。私は血が凍るように怯え銃を構えた。

しかし、暗黒の中に銀の目が二つきらりと光った。それは私の猟犬だった。

私はほつと安堵して呼び寄せた。犬は鼻を鳴らして私の手のひらをぺろぺろと舐めた。

私は腰の袋から干し肉を出して犬に与えた。

そのとき私の頭上でバタバタと何かの羽音がした。ふくろうか、夜

鷹か。

私は半ば無意識に銃を向けてそれを撃った。

鳥は高い木から、どさりと芝生の上に落ちてきた。

銃声はどこまでも、暗い森を陰々と響いて消えなかった。

私は何者かが、薄笑う声を聞いてぞっとした。

しかし、それは風が木の葉を吹き抜けた音であった。

犬ははや、落ちた獲物を咥えて、私のそばに帰ってきていた。

そしてどさりと、その鳥を私の足元に投げ出した。

私は何を思っていたのだろう。

急に激しい頭痛に襲われて銃をほおり出しその場に蹲った。めまいがして吐き気がこみ上げてきた。

やがて少し収まると、私は激しい渴きを覚えた。私は抑えがたい渴きに今、打ち落とした鳥を

ナイフで引き裂き忘我のうちに、その血をすすっていた。

血は舌の上を小気味よく回り、私の渴きを癒した。

私は更に腿の肉を切り取って食べたのだった。

私はしかし、再び襲った頭痛のため、今度は意識を失ってそこ倒れてしまった。

朦朧とした意識の中で大きな牙が私を引き裂こうと迫ってきていた。

どれほど建ったことだろうか。私は再びそのくらい森の中でわれに帰っていた。

まるで酔ったように私は何も考えられなかった。

そのとき風が吹いてきた。風のかすかな響きのなかに、私は誰かが私に語りかけているのを感じた。

はじめは、そっと諭すように、しかし、やがてそれははっきりした声になり、私は聴いたのだった。

それは私に言っていた。

「お、、、おまえは、、、なに、、、をたべた、、、のだ、、、。もう、、、一度、、、よく、、、みて、、、みる、、、。」

突然、真つ赤な月が雲間から現れ木々の間から月光が差し込んだ。
そして私は見たのであった。
食い散らかされて、手足のもぎ取られた嬰兒の屍骸を。

第8の夜景画ここに終わる。

第9の夜景画・第10の夜景画

第9の夜景画ここに始まる。

それは夜だった。いつ果てるとも知れぬ夜だった。

一人の小人がよちよちと、その、陰惨なおいのする森の中に消えていくと、夜は一つの獲物を射止めた獵人のように、うちふるえるのだった。

そして森は密かに、血をながして 小さく笑うのだった。

そんな夜に私は生きていた。そして「夜は私を生かす血液なのだ」とつぶやくのだった。

ロウソクの暗い炎が揺らめき、私をいくつもの、狂想へとかりたてた。そうして、

わたしのなかには痺れと恐怖が混在しているのだった。

「いけない、その毒をのんでは」

しかし、私はすでに、なみなみと注がれたその毒を幻想の暗い岸边に投げ入れてしまっていたのだった。

第9の夜景画ここに終わる。

第10の夜景画ここに始まる。

暗い低い地平線に、私は確か横たわっていた。目を上げて陽が何時

間か前に沈んでいったほうを見やると草地はざわざわと、無風なのに、怯えて騒いだ。

「静に。」私のではない声がしかりつけるとようやく、草は麻酔的な安らぎに浸されていったらしかった。

そのひれ伏した草地を越えて丘の向こうに私の幻想の翼は傷つき血を吹いてあえいでいた。

暗い霊の火たちが草地を黒い空気でかき乱しいくつ者不気味な影を立たせた、

笑うでもなく歩むでもなくそれらは草地の中に余りの静けさで立ち尽くしていたのだった。

私は鳥の羽ばたく音を聴いた。

眠りは駆逐され、私は起き上がってその鳥を待った。

小黒い空を見上げ、私は真上でその羽音の止むのを感じた。

それから私の目の前にどさりと何かが落ちた。

かすかな光の中に私は見たのだった。

息絶えた嬰兒の屍骸を。

そしてまた夜がひたひたと迫ってきていた。

第10の夜景画ここに終わる。

第11の夜景画

第11の夜景画ここに始まる。

ある晩、一人の影がとぼとぼと道をたどっていった。

血色の月が崩れかけた寺の、屋根から覗き、陰惨な花々が見えない空間に咲いているような宵であった。

「ああ、なんという夜だ」影はつぶやいた。すると、その声がいくつ者輪になつてよんだ

空気の中を伝い妖花の群生する暗黒の湿原まで響いていき花びらをはらはらと散らせたのであった。

月が木々の間から差し込み、影はまた、森閑とした、森の中の小道を歩んでいた。

ふくろうの声さえ聞こえず、幾千もの葉のざわめく低い音が重く響いた。

「なんという陰惨な夜なのだ」影はまたつぶやいた。長く影が木々の間を幽霊のように引いていた。

未知が尽き、森の暗さが永遠に続くところまで来ると、そこに一つの縊死体が枝からぶらさがって縄目に添って緩やかにまわっていた。

黒い古びたマントをはおり、髪はぼつぼつのその死体はかっと、血走った目を見張り、鼻からどす黒い血を垂らしていた。

月の光がその& amp;#34847;のような顔を照らした。

影は訪ねた。

「どこへいけばいいのか」

そのとき死体は目をぐるりと動かした。

「行くがよい。どこまでも。」

地のそのうなりごえのように、それは答えた。

そしてまた黙り込んで、哲人のように、微風に揺らめいているのだ
った。

影は今度は人の通ったこともない落ち葉の上をあてどなく、歩んで
いった。

突然、樹上でけたたましく鳥が鳴いて飛び立ち一瞬沈黙は破られ音
の陰鬱な我が広がって消えた。

「なんて陰鬱な夜なんだ」

影が呟くと、その声が重く陰に籠り低く朽ちた葉の上に広がってい
くのだった。

森が途切れると草原に出る。

果てしもなく広がる草の波。月が虚空に懸かりその下に

ざわめくような草の波が切なく、荒涼とした心をかきむしるのだっ
た。

胸まで草に浸かりながらゆるく行くと、影は消え去り朧な形象がう
かびあがる。

干し一つ視えない空に、その垂れ込めた空に月がぼんやりかかって
いる。

風が吹き草がざわめき、やがてその形象は彼方の波間へ遠ざかって
消えていくのであった。

第11の夜景画ここに終わる。

第12の夜景画・第13の夜景画

第12の夜景画ここに始まる

また、夜が来た。

一切は暗く、あたりを埋め尽くし私の後に引く影さえなかった。私はロウソクの火を吹き消し本を閉じた。

あたりに蝶の鱗粉のような生臭い闇が漂っていた。私は立ち上がり、ゆっくりと寝室へ歩いていった。

数々の甘美な夢や希望が私の中でいつしか、潰え去り、やがて恐ろしい幻の人魚たちが私の肩越しに痺れるような唾液を滴らせていくのであった。

「いけない。戻るんだ。影が私の視界の中に立ち尽くしている。」

死人たちはゆっくりと、棺のふたを開けて身をもたげた。

青白い月光の下にあって、私の脳はなめくじで一杯になっていた。

ふと彼方を見やると、そこにはぬらぬらするような、赤い月が昇りかけていた。

そして、月の照らした中に私はふと、妹が来るような気がしてふるえた。

第12の夜景画ここに終わる。

第13の夜景画ここに始まる。

夜が生暖かく、私の周りにもあった。

私は沈んだ心を抱いたまま、そっと、起き上がった。

地下室に通ずる城の鉄門が低く軋み、風は静かにヒースの荒原を吹き渡り死んでいく老婆の

みぎわの声のように響いていた。

私は死んだ妹のことを想っていた。

私は出かけなければならなかった。

私が歩み始めると近くの森の中に、幾筋もの、美しく青紫に光るナメクジの群れが灯を燈し始めた。

ぼんやりと、青い燐のように、光るナメクジ。

私はその下を潜り抜けて、夜の陰気な原へ出て行った。

第13の夜景画ここに終わる。

第14の夜景画・第15の夜景画

第14の夜景画ここに始まる。

森が鬱蒼と繁っている夜、私はその中を一人で歩いていた。
木の葉が静に散りだし、森は息を潜めていた。

遠くに薔薇の木がありうすむらさきの花卉が揺れていた。

巨像の影が私の中でかげろふのようにたゆとい、それはひぐらしの
ように私の耳の中にまで響いていた。

私は立ち止まり夜気のなかに溶けかけている遠くの薔薇の木を見つ
めていた。

時間が流れていき、水晶に化石していくようにな薔薇の花を私は放
心した目で追っていた。

第14の夜景画ここに終わる。

第15の夜景画

第15の夜景画ここに始まる。

私ははずっと物思いにふけて、あるいていた。

その白い柵は遙か彼方まで続き、何か、閑散とした荒れ果てた町を妖しげに彩っていた。

無言で通り過ぎていく、亡き乙女達の血まみれの靈氣が私に微笑していた。

私はなおも、池のほとりを音のない枯れ草の上を歩み続ける。

私の魂は揺らめき、滑りながら果てない幻堂の中へ落ち込んでいく。

私が再び目覚めたとき、既に夕べとなり、夜となっていた。

気が付けば昨夜のままに、古びた机に向かいペンを持ったままで、眠っていたのだった。

私は昨夜疲れきって町のざわめきの中から帰ってきた。

頭痛が襲い背中には冷たいミイラの齒形さえ付いていた。

私は扉を開きそしてこの机に向かった。

ランプを点けやっと静もってくる光の中でペンをとり心の中のわだかまった血色の夜のものがたりを書こうとしたのだ。

私は昨夜の記憶をたどり始める。しかし、思わず眩暈を感じしゃがみこんでしまう。

冷たい汗が吹き出し、心音が過敏に感ぜられるのを必死にこらえた。

やがて治まってくると私はゆっくりと立ち窓のところへ急いだ。

想いカーテンを押し開け私は外を見た。

冷たい石の歩道に人影はなく、街灯だけが青く路面を照らしていた。

私は冷気が押し寄せてくるガラス窓に頬をつけ、なおもぼんやりと見下ろしていた。

ふと、背後に何かを感じて振り向いた。

底には白い寝室衣の妹が立っていた。

妹はまるで、うずまく妖気のように佇みやがて消えた。

そして、私の中に再び拭いがたい疲労がのしかかってくるのを感じるのだった。

最後の夜景画ここに終わる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9687f/>

一五枚の夜景画（散文詩集）

2010年10月20日12時29分発行